

③⑨ 新春賀摺

山水も春の香のして空高し  
野のはるやこんな家にも生香  
物の香のたち重るか朧月  
はるよ春心に持たぬ貧なれば  
紅梅やきたなくなりしうめの中  
春めくやよし野あたりをふる小雨  
鶯のはらにたもたぬ雪哉  
をめぐと鶯の吹かる、余寒哉  
身ひとつをわれとなくさめて春の雨  
笑ふ事はいくつもほしや梅の花  
春のえむ音や朧の宵の程

(下段)

うくひすの不足顔なる曇りかな  
正月の山もこほる、木の葉哉  
てふの羽の朝からかろき日和哉  
来る人の来もせて梅の盛哉  
はるかせや海の方から夜の明る  
おほろなるはしめか水のひた烟る  
鳥の吸ふ程はつゆ持てはるの草  
野やしきのそれか境か夕かすみ

抱鶴 令甫 青路 惠甫 路生 國草 呂齋 麴步 老甫 鹿阿 古雀  
国杖 笠我 蘭雨 柳坡 蝶舞 加津衣 適甫 罔甫  
少年 少女

④⑩ 新春賀摺

うくひすの間々や滝の音  
住馴し甲斐も有けり梅の花  
向はんとすれば鏡に柳かな  
鶯の声のもとかし藪の奥  
元日の心は花の荅かな  
若水に古きもおかし釣瓶縄  
朝々は知る人はかり門柳  
むた足と思ふて来れば梅の花  
呼声もつやの有けり白魚売  
梅か、や旅のはなしは尽ぬもの

蓬萊の山つ、き也夜着の袖

玉光 白林 乙也 春水 花流 船志 机文 寒水 一雅  
謝堂

④① 出嗒駟の図

出嗒駟の図  
蚊のせゝる寐覚もひとつ旅日記  
ころくくと

後に書たそ

駟の図

破れむと

思ふ紙帳のいひきかな

乙二

且々

④② 歳旦摺

元日や障るものなき岸の波  
梅か香や鳴子付たる離れ木戸  
行としを惜みて斯す姿かな

四世 桃隣

④③ 良夜湖辺に遊ひて

むしの声白地なりけふの月  
良夜湖辺に遊ひて

三千丈

丈左

行水に露おく月の真つ昼や

④④ 文郷、秋守二人句摺

曙を袖に  
うけるや  
芹の水  
かみしめ様  
筆のうらにも  
余寒かな

文郷

三日つきの

そりにひるむな

はるの草

秋守